

アンビシャス・ガール

— 相馬黒光と新宿中村屋 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

裕福な名家の相馬愛蔵と結婚して新宿中村屋を創業した相馬黒光(1876-1955)は才気あふれる青年たちを惹きつけた。芸術家、文学者、演劇人などを支援するために設けた交流の場はいつしか中村屋サロンと呼ばれて歴史に名を残す。ときには海外からの亡命者も匿い、その中心にはいつも母親のように振る舞う黒光がいた。

商売でも愛蔵のパートナーあるいは一家の要として独自の存在感を発揮した。日本初のクリームパンや本格的なインドカレーなど時代に先駆けた商品と共に飛躍的に事業を発展させていく。

新宿中村屋という稀有な舞台におけるドラマティックな人間模様は明治、大正、昭和にかけた激動の社会史の縮図と見ることができる。とりわけ「生涯わがままを通した女」とみずから語った黒光は近代的自我に目覚めた女性の光と影を一身に体現した。

進歩を止めないための代償

黒光は旧仙台藩士の三女として宮城県仙台市で生まれた。本名は星良ほしりょう。没落した士族の末裔として貧しい生活を余儀なくされた。

幼い頃から熱心にキリスト教会に通い、12歳で洗礼を受ける。兄のように慕った神学生の島貫兵太夫は利発で向上心の強い黒光をアンビシャス・ガールと呼んだ。



相馬黒光

尋常小学校卒業後、向学心に燃えて学費の安いミッションスクール宮城女学校に進学する。だが父が病死し、アメリカ式の教育に反発してストライキを起こした先輩たちに連座して自主退学した黒光は島貫らの援助で横浜のフェリス英和女学校に転入する。

在学中は文学に傾倒し、のちに作家として大成する北村透谷や島崎藤村が教鞭をとっていた明治女学校へ転校。女性の地位向上へ『女学雑誌』を創刊し、同校の校長も務めた巖本善治は野心的で光り輝く才能を少し黒く隠すようにと黒光のペンネームを授けた。

卒業後、島貫の勧めで養蚕事業家の相馬愛蔵と見合い結婚する。愛蔵は信州で代々庄屋を務めた名家の跡継ぎで東京専門学校(早稲田大学)を卒業し、クリスチャンとして禁酒運動や娼妓運動にも積極的にかかわっていた。

二人は愛蔵の故郷・安曇野に移り住んだものの、田舎での刺激のない日々は黒光にとって苦痛でしかなかった。のちに口述筆記した自伝『黙移』で「何とした安逸、私はまったく進歩の止まってしまっている自分をそこに見出したのであります」

と当時の耐えがたい心境を打ち明けている。

心労で病いに倒れた黒光は愛蔵と共に上京することを婚家に願い出た。認める代わりに長女の俊子を残していくこと、養蚕シーズンに愛蔵が実家に戻って仕事することを条件として呑まされた。俊子を重い代償として黒光は東京へ向かう。

荻原守衛への愛と別れ

明治34年(1901)、4年半の安曇野生活を終えて上京した二人は本郷で借家住まいを始めた。徐々に普及しつつあったパンに目をつけ、東大正門前の中村屋を屋号や店員ごと買い取って小さなパン屋を開業する。

学生相手の商売は狙いどおり成功し、3年後にシュークリームをヒントにしたクリームパンを考案して大評判になる。明治40年(1907)、勢いに乗って新宿に支店を出し、2年後には新宿駅近くに本店を構えた。

この頃から文化・芸術の最先端の交流の拠点として中村屋サロンが賑わっていく。なかでも愛蔵と同郷で相馬家に出入りしていた彫刻家の荻原守衛のちの碌山は年上の黒光を慕って毎日のように通ってきた。愛蔵が実家に戻っているときでも、けなげに働いている黒光を支え、子供たちと戯れ、家族の一員のように過ごしていた。やがて守衛は友人の高村光太郎に「わが心に病いを得て甚だ重し」と手紙に書くほど黒光を愛すようになる。

夫との関係に悩んでいた黒光も守衛の求愛に激しく揺れ動いた。しかし土壇場になって夫と別れられないことを告げる。絶望した守衛は中村屋の居間で咯血して倒れ、そのまま息を引きとった。黒光は飛び散った血を見て失神し、郷里に送られる守衛の棺にすがって泣き崩れた。高村光太郎は黒光のせいで守衛が死んだと激しく罵った。

悩み荒ぶる魂の象徴として

大正4年(1915)、イギリスの官憲に追われて亡命したインド独立運動家のボースを匿う。第1次世界大戦が勃発し、日英同盟を結んでいた日本

政府は国外退去命令を出していた。

欧米列強に対抗するアジア主義を唱えていた頭山満に強く請われ、安曇野の実家から呼び戻していた俊子をボースと結婚させる。俊子はエロシェンコ像で有名な画家・中村彝なかむらつねの少女像のモデルとなり、熱烈に求婚されたものの黒光らの反対で断念した。ボースとのあいだに二人の子を儲けたのち肺炎を患って26歳の若さで他界する。

ボースとの縁で新宿中村屋は昭和2年(1927)、喫茶部の開設に伴い純印度式カレーを売り出した。洋食屋のカレーが10~12銭の時代にフルーツ、コーヒーとセットで80銭と高額だったものの、材料やスパイスを厳選して飛ぶように売れた。

ロシア語を学んでいた黒光は失明したロシアの詩人エロシェンコもアトリエに住まわせて4年間にわたって世話をした。ロシアの職人・技師を雇って菓子やピロシキを発売し、店員の制服として民族衣装のルパシカを着用させた。

経営者としての順風満帆の日々は第2次世界大戦で暗転し、昭和20年(1945)の東京大空襲で本店、工場、寄宿舎が焼失する。それでも不死鳥のように営業を再開し、多店舗展開などを通じて戦後の復興を果たした。愛蔵は昭和29年(1954)83歳で亡くなり、黒光も翌年に79歳で波瀾に満ちた生涯の幕を下ろした。

寛大な愛蔵に対して黒光はむしろ家父長のように自我を押し通した。夭折した俊子はその犠牲になったといっても過言ではない。家から解き放れたいと願いながら家父長になることでしか自己を確立できないところに黒光の葛藤、矛盾、焦燥があった。

荻原守衛が急逝して数日後、彫刻家の戸張孤雁と共にアトリエを訪れた黒光は彫刻台に残された遺作の「女」を悩める女の象徴として凝視する。「高い所に面を向けて緊縛から脱しようとして、もがくようなその表情、しかも肢体は地上より離れ得ず、両の手を後方に回した悩ましげな姿勢は単なる土の作品ではなく、私自身だと直覚されるものがありました」(『黙移』)。

東洋のロダンと呼ばれた守衛は「人間を描くとはただその姿を写し取るのではなく、魂そのものを描くことなのだ」と語って悩み荒ぶる黒光の魂を命をかけて表現した。